

春告草

第100号 平成30年3月23日 進路指導部発行

失敗を恐れず、自分の信じた道を進め！

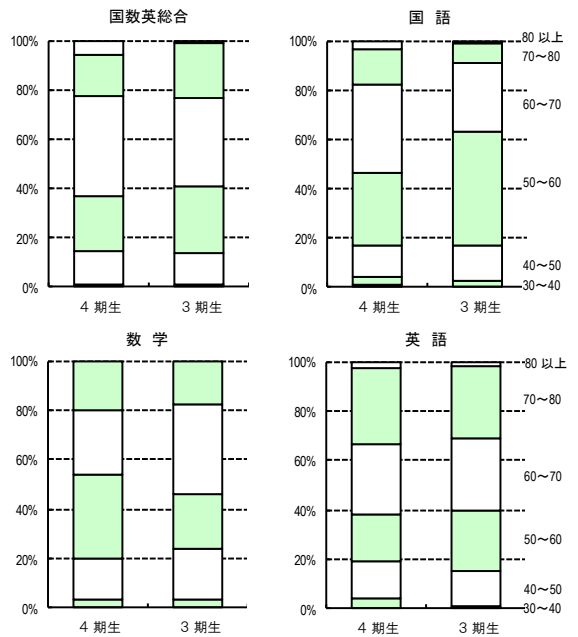
3期生が卒業していった。彼等の入学は平成24年。仮設校舎で授業が行われていた頃である。高校生が高1から高3まで3学年、中等生も前期課程3学年がやっとそろった中で学校生活が始まった。東日本大震災の余震が時々あって、そのたびにプレハブ校舎は大きく揺れた。新しい学校生活に不安を感じた生徒も多かっただろう。その分、遅しく成長したのかもしれない。6年間の学校生活を送り、進学実績では難関校への合格を果たす者も多かった。サッカー部、野球部をはじめ、遅い時期まで部活に打ち込んでいた生徒に難関大合格を果たした者が多かったことが、今年の大学受験を振り返っての印象である。受験体験記を書いてくれと、何人かをお願いをしたところ、「不合格体験記」を書かせてくれと申し出てきた卒業生がいた。難関国立大に果敢に挑戦し、希望は果たせなかったが、受験を通して成長できたことを綴っていた。後輩の皆さんには「不合格を恐れず、自分の信じた道をひたすら突き進んでほしい」との思いが文面から伝わってきた。5年生は「受験報告会」で輝ける栄光の陰に弛まぬ努力があったことを知ったことだろう。来年、再来年、進路実現をするのは5年生、4年生の皆さんだ。目標を高く掲げ、気持ちを強く持ち、力いっぱい挑戦して欲しい。

模試結果を振り返り、1年間の歩みを確かめよう

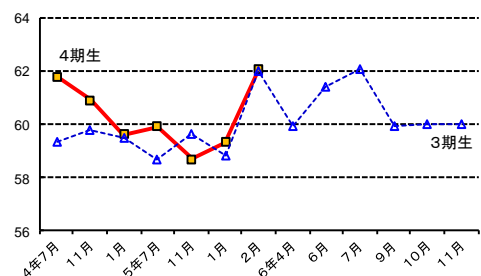
5年生が行った2月マーク模試の結果と3期生が同時期に行った結果を比較した。右図は、全国偏差値の度数分布(階級幅=10)を積上げ縦棒グラフ(縦軸%)で示したものである。各棒グラフは上から成績上位層を示しているが、全国偏差値80以上の者が、国数英総合、国語、英語で確認できる。人数にすれば10人に満たない数であるが、国数英総合が最も厚い分布となっている。成績上位者は教科バランスが良いということだろう。データは示していないが、国語は1期生から4期生までのの中では最も良い状況である。英語は英語学力が高かった2期生の分布に近く上位層が厚い。しかし、両教科とも中位層以下が厚くなっている。このことが最も顕著なのが数学である。上位層の厚さは3期生と同等レベルで、これは1期生、2期生と比較すると全国偏差値60以上の者が20~30人多い状況である。しかし、60未満の層が厚く、80以上の最上位層はいない。理系難関大を目指すのであれば、数学で他の受験生より頭一つ分抜け出す学力も必要だ。自分で限界線を引いてしまうことなく、一つ上を目指す貪欲さを期待したい。

また、これまでの模試の3教科総合成績の平均点偏差値推移を右に示した。4月以降の模試には、既卒生も参加する。受験生全体の上位層が厚くなるので、一時的に偏差値はダウンする傾向が強い。しかし入試本番では、そういったレベルに達しないと、難関大突破は難しい。さらに気持ちを強く引き締めて取り組んでいこう。

5年生 2月マーク模試度数分布



5年生 平均点偏差値推移(国数英総合)



自分の実力を知り、目標までの強化プランを立てる

次に4年生の1月模試の結果を検証してみよう。

5年生の国語成績が1期生から4期生までの中で最も良い状況と書いたばかりだが、4年生の状況はさらにそれを上回る。全国偏差値60以上が学年全体の57%を占め、平均点偏差値は61.2という高水準である。数学は3期生に比べると上位層は減っているが、下位層は薄く、しっかり取り組んでいる様子が伺える。

問題は英語である。比較している3期生のグラフと比べて大差は無いように思えるが、英語の成績が高かった2期生の同時期成績と比較すると、全国偏差値60以上の人数は半減している。「入試は英語で決まる」ということは、いろいろな先生方から言われていることと思うが、今年の卒業生の合格状況をみても、これは正しい。それは文理に関係なく言えることだ。同時期に行ったGTEC Speaking Testの成績が良かっただけに、残念に思う。データは掲載していないが、設問別成績では、長文読解問題の得点率が低い状況がある。センター試験を初め、入試問題では長文読解問題の配点は高い。読解問題の克服が得点力アップのカギとなるだろう。また、英語が苦手ということ人に限って、実は英語の学習時間が少ないということはあるものだ。好きな勉強、得意な教科だけやっていると、難関大合格は難しい。英語学習の時間を増やすことから始めてみてはどうだろう。

新テスト

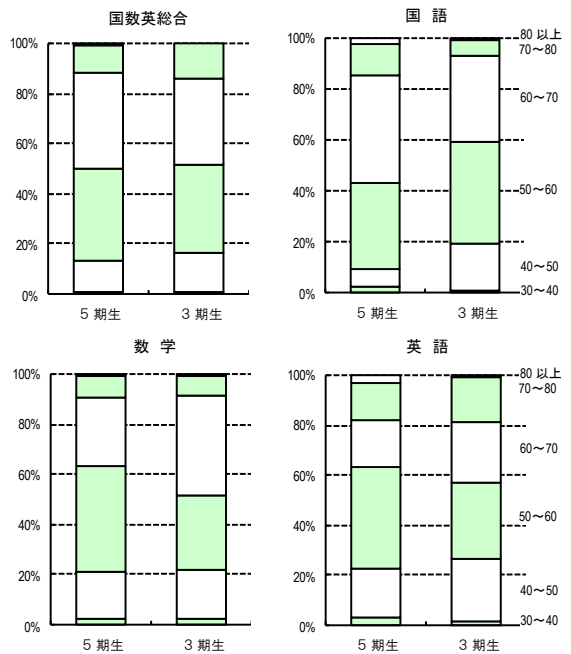
東大は英語外部試験を合否判定に利用せず

2021年1月から実施される「大学入学共通テスト」で、東京大学は合否判定に英語民間資格・検定試験を利用しないことを発表した。記者会見した福田裕穂副学長によると、制度の移行期間として23年度までは、併せて実施されるマークシート式試験と個別試験の成績で判定するという。ただし、受験生が外部試験を受けることは必須とし、その成績は入学後の能力の伸長を調べるデータなどに活用する。

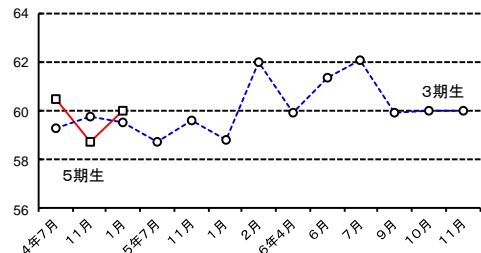
春告草99号で解説したように、新テストを最初に受験するのは新4年生である。2021年度入試が新テスト元年であるが、24年度入試までの4年間はマークシート式試験と外部試験を併用する形で新テストが実施される。東京大学の発表は、英語の成績はマークシート式試験と個別試験の成績を利用するという内容だ。

各資格・検定のグレードをCEFRの基準に対応させる(99号記事参照)といっても、実施目的の異なる民間試験を大学入試に用いることの妥当性については、識者からいろいろな意見が寄せられていたところだ。記者会見では、高校の英語の授業が民間試験対策になる弊害があることなども指摘されていた。今回の東大の判断が、他大学にどう影響を与えるのかなどに今後も注目していかなければならない。

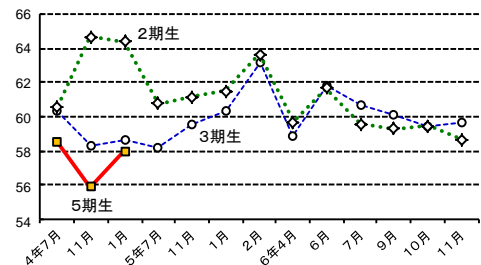
4年生 1月記述模試度数分布



4年生 平均点偏差値推移(国数英総合)



4年生 平均点偏差値推移(英語)



平成30年度大学入試 主要大合格状況 (2018.3.22 現在)

北海道大	2	電気通信大	4	早稲田大	17
東北大	2	横浜国立大	3	慶應義塾大	17
筑波大	1	千葉大	1	上智大	12
埼玉大	1	名古屋大	1	東京理科大	17
お茶の水女子大	3	大阪大	1	青山学院大	12
東京大	1	九州大	1	中央大	21
一橋大	3	首都大学東京	4	法政大	19
東京外国語大	3	埼玉県立大	1	明治大	38
東京医科歯科大	1	横浜市立大	1	立教大	15
東京学芸大	3	国立看護大	1	学習院大	1
東京農工大	4	防衛医科大	1		

現役生のための集計である

3期生の大学受験を振り返る

3期生担任 進路指導担当 齋藤 桂子

3期生の受験をほぼ通時的に振り返ってみよう。

5年後半

受験態勢に入る一つの大きな節目は、まず、5年の鷹校祭の後である。私立の進学校はこの時期に生活をリセットするからだ。難関大を目指す生徒の担任にとって、部活の引退時期は気にしなければならない問題であるが、動きが早かったのは水泳部だ。顧問の先生が「これからは体調維持のためにたまに泳ぎに来い」と生徒を勉強に向かわせてくれたのはありがたかった。

5年12月末には西湖畔での勉強合宿。数Ⅲなど教科によってはここで授業の先取りが行われたが、主眼は翌月のセンター試験同日体験の準備であった。同日体験で最も高かった得点率は82% (国数英)、1年後の本試では90% (5教科7科目)。いずれも同じ男子であった。1年でこれだけ伸びるのである。

さて、この間には平行してサードステージ論文の執筆もなされていたが、結果的に、理・工・農、外国語系の合格者と論文テーマとの関連は多少なりとも見られるようである。小論文の対策や推薦入試を考える場合にも資すること大であるので丁寧に取り組んだ方がよい。

6年1学期

6年進級前の春休み、これが二つ目の節目であろう。ここで見事な切り替えを見せたのは吹奏楽部だ。最後の定期演奏会後は皆、涙でふらふらであったが、翌日には自習室の定位置を決め、皆身を入れて勉強し始めた。学校の春期講習に参加した者もいる。この様子に触発された他の部の女子も多かったと思う。

また、この頃から全体的に予備校に通う者が増えてきたようだ。

6年に上がるとほぼ毎月模試が実施された。必要科目にしぼった受験が可能となったが、数学をまったく必要としない者(私文)と数Ⅲまで要する者がそれぞれほぼひとクラス分だったので、4期生以降の様子も見て行けば、5年までのカリキュラムを考える際に有効なデータになるのではないかと思った。5月には第1志望宣言書の提出。私のクラスで宣言書通りに合格できたのは9名(うち3名は推薦入試)、現実には厳しいが志は高くもった方がよい。通常、秋口に国公立から私文にシフトする者が出てくるものだが、予想に反し、数学をあきらめた者はわずかだった。本校の場合、5教科を勉強したことが仇(あだ)となることはあまりなく、むしろ私学の併願先の上昇にもつながっていると言える。

6年2学期 — 冠模試のことなど

2学期は早々にセンター試験の出願準備。鷹校祭の合間をぬったタイトなスケジュールだったが、滞りなく出願を済ませることができた。校内の文化祭の気分が高まる中でも、やはり6年生は別である。前々日まで自習室で黙々と勉強をしている者がいた(彼らは北大に合格している)。祭り濃度の高い生徒は不満だったようだが、互いに気を遣って過ごしていた時期であった。行事に対して2期生のような熱量はないが、短期集中で取り組んだのがこの学年の特徴であった。

鷹校祭が終わると、早朝から夜まで、自習室はもちろん、教室、3講、図書室で集中して勉強する姿が目立つようになった。主要大学名を冠した、通称冠模試は各社1~2回、夏・秋に実施されるが、秋11月のものを参考にするとよいだろう。以下、まず河合塾全統オープンの結果を挙げる。東大文Ⅲに合格した生徒は11月でB判定、名大(医-理学療法)はC、一橋(商)はB。次に代ゼミでは、北大(総合理系)がC。C判定がボーダーラインであるので、本校で難関国立大学に合格するには11月の段階で射程距離に収めていることが一つの目安かもしれない。しかし、私大は様子が違う。慶大(法)の合格者は代ゼミでE判(合格可能性25%)であったので、私大は残り2か月半でまだ狙える状態にあると言える。ともあれ冠模試は志望する大学のものがあるならば必ず受けるべきである。ここでは挙げなかったが駿台模試がおススメである。冠模試がない場合は、予備校系の総合模試を受けておこう。総合模試で注意すべきところは早大のスポーツ科学部だ。河合塾9・10月の全統でA判、セ試本試後のリサーチでもA判だった生徒が不合格だった。実技はなく学力だけを見る入試なのだが、浪人生が多いため模試があまりあてにならないのだ。三鷹は全敗であった。

受験突入 — センター・個別・国公立2次

11月末は、調査書申請前の2者面談。年が明けると、基準日で最も早いセンター試験が行われた。主要3教科の本校の平均点は全国のそれに比し、数学①を除いてほぼ3割増しであった。英語は高値安定。文系にとって7割取れば有利に働くと言われる数学が好調。半面、上位層の国語が崩れたのが痛かった。今年の国語は決して難しくなく、上位層なら取りこぼしても170は固い問題だったと思う。小説の読解に手を焼いた者が多かったが、これは4期生にも持ち越される課題である。

セ試を含め、私大個別、国公立大2次出願にあたり大きなトラブルの報告は受けていない。この点はそつがなかった。ただ、セ試当日「数ⅠA」を選ぶべきところ、20分間「数Ⅰ」を解いてしまっていたという生徒が私のクラスにいたので落ち

着きは必要だ(幸いにしてこの生徒は第1志望の首都大に合格した)。

セ試以降は通常の授業がなくなり、各教科の大学別講習が行われた。例年に比べると、春夏秋冬休みや放課後に講座をおいても3期生はあまり受けに来ない、という声が先生方から寄せられた。セ試後の講習は、数名の参加にとどまり、受講者のリクエストで講義内容を組み立てることも可能となった。この無料の個別授業を利用しない手はないはずだ。学費をあてられるならば、学校と予備校の双方をうまく利用するのがよいと私は思う。長く受験指導を専門にしてきた予備校講師の話は傾聴に値するし、外部からの情報収集は大切である。一概に予備校に通うことは悪で、学校だけでがんばった生徒が偉いというものでもないだろう。お茶女大に合格した生徒は、授業の空き時間は無く、朝と放課後は学校の講習、そのあとに予備校に通っていた。21時過ぎに吉祥寺駅で私と偶然会うことも何度かあり、このサイクルを1年間続けた末の合格であったと思う。

国公立大前期の試験は2/25・26に実施されたが、その後は受験の熱が冷めてしまう者が多かった。後期入試は敗者復活のチャンスであるから、3/12まで緊張の糸を切らしてはならない。前期だけでふらつくあたりにまだまだ甘さが感じられた。

入試結果に思うこと

3/22時点で判明している入試結果を報告しよう。まず国公立大学だが、今年は京大を除き旧帝大の全てに合格者を出すことができた。また、一般受験でお茶女大に3名、東京医歯大(医・保健)合格も新たな実績である。一橋の3名は、5年7月の学診で英・数が偏差値70を越えていたが、強い数学の力が土台にあってこその一橋突破であった。一方で、今年も東工大の壁は厚かった。昨年は10名の合格者が出た農工大は4名。これは東工大志望者が出願先を下げずに突撃したことも影響している。東工大至上主義のリケダンプ3期生は多かった。その意気やよし(?)と言えるかもしれない。首都大は4名、うち指定校推薦が2名という厳しい結果に終わっている。皆、セ試の得点不足による不合格である。学年の中～下位層が首都大を手中に収めるにはセ試で失敗しないことが前提である。

次に私立大学についてだが、慶大が昨年の倍以上の17名。東大、一橋大合格者が併願で手堅く押さえていた。また、8月まで活動を続けていたサッカー一部の合格も素晴らしかった。中央(法)も堅調であり、一橋(法)や明治(法)との併願が成功している。自身の適性を見極めた進路選択であったと思う。津田塾・東京女子・日本女子の3大女子大で、本校は東女に強い。昨今は共学志向が強いが、いずれも伝統ある女子大なので国公立志望の女子も併願先に選んでほしい。

東大理科・東工大・国公立大医学部医学科の合格は本校の悲願であるが、その夢は次年度に託されることとなった。しかし、慶大(理工)・早大(創造理工)に複数の合格者が出たことは画期的なことであり、旧帝大の合格はほとんどが理系学部である故、理系の高い力は着実についてきている。当面優しくないカリキュラムのなか、4期生にはブレイクスルーを期待したい。

本校の適性検査、定期考査では女子が軒並み上位を独占したものの、大学入試では圧倒的に男子が優勢だ。旧帝大・一橋合格者のなかで女子はたった1人(阪大)であった。がんばるだけでは受からない。自力で人生を切り開くための学歴を手に入れようとする、闘争心が女子にあったらどうか。人生をかけていただろうか。かけていたらごめんなさい。この不合格から何かを学び、何度でも這い上がり、眼前にはだかる壁を次こそ自分の力でぶち破ってほしい。女子よ闘争心を持って。

野球部の入試結果は特筆すべきものである。夏の大会3回戦進出の勢いとともに国立私立とも高い実績を残すことができた。しかし、皆が今年の例を基準に考えるのは危険である。最難関国立大に現役で入るには、部活は6年5月が最終リミットであると私は考えている。それもその生徒の資質が高い場合に限る。6月に入っても受験態勢を作れない場合は、矛盾するようだが、浪人も覚悟しつつ何が何でも現役で入るつもりでがむしゃらにやるしかない。そういう生徒があと一歩で不合格となり浪人で合格、あるいは奇跡的に現役で合格したりするものである。奇跡を期待してはならない。

終わりに

学診の経年比較を見ると、3期生は全体の平均こそ悪くはないが、最上位層がいないことが悩みであり、正直なところ1期、2期と右肩上がりの実績も今年は一休みかと思われた。しかし、思いの外の結果が得られたのは、生徒が最後までプライドを捨てずに勉強を続けたからであろう。私はとてもおもしろい経験をしたと思っている。講習に加え、受験期には個別の添削指導、面接練習、精神的なケアなど多くの先生方のお力添えもあったことに感謝申し上げる。そしてこの進路通信『春告草』。3期生が後期課程に進級すると同時に発行された『春告草』は今回で記念の100号を迎えるという。絶えず3期生の進路指針となってくれ、私もたいへん勉強になった。本当にありがたく、心強い存在であった。

他校で私が卒業生を出してからわずか4年、大学入試の様相はだいぶ変わった。6期生からは新テストがはじまる。この寄稿がどれほどの命を保つか分からないが、後続の皆さんの進路選択に少し役立ててもらえれば幸いである。